

心理学研究方法論をめぐる省察： 多種多様な心理学の統合は何故必要か

吉田章宏

はじめに

これまで、私は、「心理学研究方法論をめぐる省察」と題して四つの論稿を順次に発表してきた。その内容を相互に区別している副題を刊行の順に記してみるならば、1)「心理学の人称性：我，汝，誰彼の心理学」(2002)、2)我，汝，誰彼の心理学という「三心理学の不連続化と連続化の道」(2003b)、3)「心理学の多種多様性について」(2003a)、4)「多種多様な心理学の統合の可能性」(2004a)、となる。以上の四論稿のうち、1)と2)が「心理学の人称性」により区別される3種の心理学とそれらの「連続化と不連続化」の道、3)と4)が「心理学の多種多様性」とその「統合化」の可能性とその実現への道、についてであり、執筆の経緯により、それぞれに、相対的には独立に展開して現在に至っている。この二つの展開相互の間には、言うまでも無く、密接な関連がある。だが、読者には別の話の筋を辿ってきているように見える可能性がある、ということに、ある時ふと気がついた。というのは、1)と2)は、心理学の現実の歴史がどうであれ、いずれにせよ成り立つ心理学における原理的な問題を扱っているのに対して、3)と4)は、現存の心理学の多種多様性とそのような多種多様なもろもろの心理学を統合する道に至る原理を追究しているのだからである。いわば、前者は原理から、後者は現実から、出発している。しかし、実は、両者とも、目指しているのは、「心理学の統合」である。そこで、この時点で、いささか考え直して、両者の流れを合流させ、展開の筋を統合する方向に向かって、一つの議論へと纏め上げて行くことを目指そうと、思い立った。

そのように転換する理由には、一)私が、この主題による論稿を、現在与えられているこの恵まれた場で書き続けるために残された時間が、既に限られていることを自覚したこと。二)そのために、私の長年の研究主題である「授業実践とその理論」に関する論稿を、前年度の「発問の開放性」に関する論稿(吉田.2004b)に引き続いて、さらに発表して行く場として、上記1)と2)を掲載した場を、今後は活かしたい、という思いが強まってきたこと。三)「人称性」と「多種多様性」の問題を、いずれは関連づけて扱わなくてはならない、とす

れば、出来るだけ早く統合的に扱い始めたい、という思いが生まれて来たこと、などがある。いずれにせよ、本稿は、上記の、1) 2) 3) 4) の論稿の流れを受けて、いわば5) として、これまで二つに分かれていた流れを統合して論じて行く、その再出発点である。はじめに、そのことを、お断りしておきたい。

自問する「問い」

自問する。三つの心理学の原理と、心理学の多種多様性の歴史と混沌の現状は、とりあえず、わかったとしよう。そして、現実には混沌そのものである、としよう。では、統合実現の可能性はあるのか。その可能性は「ある一つのより大きな理論的構造」を立てることで、実現する可能性がある、とのことだった。だが、ちょっと待って欲しい。そもそも、多種多様性のどこがわるいのだ。そして、それに対して、それを統合することのどこがよいのだ。多種多様であることにもよいところがあるだろう。そして、統合化にもわるいところがあるに違いない。まだ姿さえ見えぬありもしない「統合」がよいとする根拠は、そもそも、どこにあるのだ。仮に、他の諸科学に、心理学には見られない統合性が見られるとしよう。しかし、だからと言って、心理学が、直ちに、それを真似しなくてはならない理由はないだろう。心理学は心理学でよいではないか。多種多様のままでいいではないか。多種多様の現状にはそれなりに存在理由が在るのかもしれないではないか。「ある一つのより大きな理論的構造」などという怪しげなものを持ち出して来てまで「統合」を呼びかけるのは、一体、何故なのか。先進諸科学の模倣という外在的な理由ではなくて、心理学に「統合」を求めるべき本質的で内在的な理由が果たしてあるのか。一言で言えば、何故「統合」を求めるのか。

以上のような一連の問いに、「答える」とはいえないまでも、少なくとも「応える」ために、私は、私なりに、「心理学」に関する問いを再出発させる。

「心理学」とは如何なる学か。

：心理学の「学」としての普遍的かつ不変的な本質は何か。

まず、素朴に、「心理学」のそもそもの原点に遡ることを、試みしてみる。

それは、いやしくも、心理学を学ぶ者なら、かつては、誰でも一度は発したことがあるに違いない問いを、自らの人生の黄昏に当たって、そもそもの出発点に立ち戻って、敢えて再び提出してみることにしよう、というのである。「日は暮れて道遠し」を、痛みをもって自覚するためにも、敢えて問うのである。そして、この問いは、しかし、心理学研究者なら、誰でも、直ちに答えることを多少とも躊躇するであろう問いである。それゆえ、また、誰も、突然には、他者から改めて問われることを、好まない問いである。また、仮に問われても、出来るならば、「それはなかなか難しい問題ですね」などと言って、笑って済ませ、答えるこ

とを避けたいと思うに違いない問いなのである。それは、いわば、問わないで置けばよい問いを「事を荒立てて」、「角を立てて」問い、「火中の栗を拾う」愚かさを敢えて選ぶことを意味する。では、その「問い」とは何か。

三つの問い それは、1)「心理学とは何か?」、2)「心理とは何か?」、3)「心とは何か?」、という三つの問いである。

以下では、自ら立てた三難問に、非力を承知の上で、力を振り絞って、よたよたとよめめきながら、敢えて答えることを試みる。以下が、その悪戦苦闘の報告である。

1)「心理学とは何か?」 まず、「心理学とは何か?」という問いに答えて、「心理学」という学問の本質について、私なりに納得できる考え方を、出来る限り簡潔に、言葉で述べることを試みてみよう。これは、これまで、長年にわたって私が学んできた多くの心理学者と哲学者に依るところが大きいことは自明のことであるが、しかし、以下に述べる意味で、心理学を私が「学問した」ことによって、私が、私の心に反映し、私が志向し、希求するようになった「心理学」の姿であると、今の私は自らの責任において言える、と私は信じていることが出来る。

「心理学」(Psychology)とは、端的に、「心の理の学」、すなわち、「『心』Psycheの『理』Logosの『学』—ology」である。その意味で、「心理学」なる言葉は、この学の本質を表現するのに極めて適切な言葉である、と私は考える。

心理学は、「心」の「学」であると同時に、「心理」の「学」である。単なる「心の学」つまり、「心学」ではない。「心理」学である。「心」と「心理」は、「心理学」の研究実践の対象である。「心理学」は、「心」と「心理」を対象として研究する。「心」を研究し「心理」を発見すると同時に、発見された「心理」に拠って「心」を更に研究する、それが「心理学」という学問であり科学である。「心」と「心理」は、「心理学者」あるいは「心理学研究者」が人間であり、「心」の持ち主であることによって、研究実践の方法でも手段でもある。研究方法は、研究対象の「心」に相応しいものでなければならない。また、研究主体である人間の「心」に可能なものであり、相応しいものでなければならない。研究対象である人間で働いている「心」は、研究主体である人間でも働いている。そこに、「心理学」の、他の諸科学には見られない独自性がある。

「学」ここでの「学」とは何か。それは、第一に、1)「学問」の意であり、さらにまた、第二に、2)「科学」の意味である。

「学問」(learning)とは、これまた文字通り、「問う を 学ぶ」ことであると同時に「学ぶ を 問う」ことである。そして、さらに、そうした「学ぶ」と「問う」を積み重ねて組

織化し体系化して行く人間の営みである。その意味で、「学問」なる語は、「学」の本質を、一語にして、極めて適切に表現している。ここで、「問う」とは、探されているもの(欠けているもの、失われているもの、隠されているもの)としての「心」と「心理」を、求めること、探求すること (questioning: quest, inquireなど) であり、また、究めること、探究すること (searching: research, investigateなど) である。

以上のように考えるなら、心理学は、「心」と「心理」に関する「問い」の歴史を集積していなくてはならないであろう。その蓄積の中には、かつては問われたが今は死に絶えた「問い」も、今は忘れ去られた「問い」も、今なお元気に生きている「問い」も、そして、新しく生まれた「問い」も、含まれなくてはならない。「問い」は「問い」を呼ぶものである。「答え」によって閉ざされるものではなくて、むしろ、さらに開かれるものである。したがって、「心」と「心理」に関する無数の「問い」を蓄積していない「学問」は、「心理学」という名に値しないことになる。「心」と「心理」に関する「問い」を「学ぶ」ことを実践することにより、「心理学」は、「心」と「心理」に関する「学問」であることを自らに証することができるのである。この「問い」の蓄積という「学問」の歴史的で哲学的な営みが現代の心理学の学界においては貧しく乏しい。

他方、「科学」(science) という言葉は、諸科学 (sciences) という言葉にも見られるように、少なくとも、三つのことを意味することに用いられうる、と私は考える。すなわち、(1) 多種多様な個別の科学の一つ一つを表現することに、(2) そうした個別科学の集合体の全体を表現することに、(3) 「科学」と呼ばれるに相応しい特質を表現することに、そして、(4) 個別の科学が、「科学」と呼ばれる特質を備えた科学であることを表現することに、用いられうる。第三の意味での「科学」であるための条件は、その条件についての基礎付けをする「科学論」、「認識論」あるいは広く「哲学」によって、多種多様に異なる。例えば、実証主義哲学、分析哲学、弁証法的唯物論哲学、実存主義、現象学、解釈学などなどのうちのどの哲学による「科学」の理解を基礎に据えるかにより、「科学」の備えるべき特質は、相互に異なるところがある。第四の「科学」であると称しても、その基礎付けに置いて異なれば、自らと同種同質の「科学」とは認め合わない二つの「科学」が対立する場合がある。そのことは、言うまでも無い。しかし、この言うまでもないことが、心理学研究者によって深く理解されているとは必ずしも限らない、というのが、今日の心理学界の現状であることも、忘れてはならない。以上のように見てくると、科学としての心理学の統合化には、その前提として、多種多様な科学論あるいは哲学についての統合的な見通し、が必要であるということになってくるかもしれない。これは容易なことではない。観念論と唯物論の両方に通じていたR. インガルデン (Roman Ingarden) の論文 (1972/1959) あるいは、実は、未だほんの一部しか見ていないのだが、彼が著した『世界の存在に関する闘争』 (*Der Streit um die Existenz der*

Welt, 1964) のような統合的視点が、恐らく必要となるのであろう。しかし、私にとって、この問題はあまりに巨大で、そっと触れないでおくことにするほかない。

ところで、「科学としての心理学」という場合、(1) 多種多様な諸科学のなかの、一分野としての、「一つの科学」と言う意味でもありうる。また、(2) 諸科学の集合体としての「科学」の一部を形成している、つまり「科学」の仲間入りしている、一科学という意味でもありうる。そして、(3) 哲学的立場のいかんはともかく、「科学である」というに相応しい資格を備えた、「科学」として信頼するに足る特質を備えている学問である、という意味を、表すこともできるし、また、時に、そのようにも、用いられている。そこで例えば、「科学としての心理学」という言葉には、通例理解されるように、学問としての客観性、厳密性、体系性などを備えている学問であるという意味だけでなく、単に、それぞれに専門を担当している諸科学とならんで、科学全体のうちで、「心理」を専門に担当する科学の一つの分科として成り立っている、という意味を含意している。で、もし誰かが、「心理」を学問することを始めた場合、その「学問」(「問いを学ぶ」と「学ぶを問う」)の仕方が、それまでに既存の心理学には見られなかったものであったとしても、また、その時代や文化の学界の主流とは異質なものであったとしても、それは「心理学」という「科学」の一分科のなかに属するという第一の意味の条件は満たしていることになる。ただし、その学問が、第四の意味、つまり、第三の意味での「科学」の特質を備えているという意味での「科学」であるとの保障は、「科学の特質」についての理解が異なる限りにおいて、無条件で与えられるわけではない。「科学」という言葉は、以上のような問題性を抱えている、と私は考える。上記の四つの意味の間に見られる「ずれ」あるいは差異と同時に「重なり合い」によって、例えば、次のような表現が行われる可能性も生じて来る。すなわち、「心理学は(例えば『物理学』が『科学』であるようには『科学』となるには未だ到っていない)、などと言った表現である。しかし、上記の(1)の意味では、心理学が「心理」を主題とする「一つの科学」であることに、間違いは無い。しかし、また、(3)の意味では、多種多様な心理学の歴史と混沌とした併存の現状に照らして考えれば、まだ、「心理学はまだ科学ではない」とも言うことも可能であろう。そして、心理学は、この(3)の意味においては、その歴史において、ある一つの哲学的視点から見た、つまり実証主義の視点から見た、「科学」であることに、あるいは、「科学」であると他から見なされることに、熱烈に執着して来た学問であったことも、想起される。私の若い日々には、「実証主義的であること」が金科玉条、あたかも至上命令のようであった。何故「実証主義的でなければならないか」という「問い」は、若い私たちには許されていなかった。私には、その執着が、「科学」とは何かに関する多種多様な立場の存在とその内容についての無知の流露であり、心理学自らが「科学」たりえていないことへの密かな気づきと自覚の表れであり、あるいは、「科学」で無いと見なされることへの恐怖と「科学」でありた

いという渴望を表現したように、今にして、思われるのである。心理学の自己理解には、「科学とは何か」という問いが、歴史的に、極めて大きな影響力を振るって来たことは、いくら強調しても強調しすぎることはない。

【科】はどうか。「科学」の「科」の字源は「禾（稲）をたばねて数える」から「品分け」という意味となったものである、という。「科目、学科、実科、全科、選科、百科、専科、分科、教科、文科、理科、眼科、内科、外科」などの表現にも見られるように、「区分けした一つ一つ」を意味する。また、「すじ道を立てて深く調べる（科学）」という意味ももつ様になった、ともされている（『角川字源辞典』1973年、角川書店、268ページ）。ここでは、どちらの解釈も不都合はないであろう。

【問い】による「探求」あるいは「探究」は、探されているものに対応することが必須である。探されているものに対応していない探求あるいは探究は、探されているものを探し出すことも探り究めることも出来ないからである。したがって、「科学」としての心理学は、その対象である「心」に相応しい探求あるいは探究によって、言い換えれば、相応しい「問い」を問い、そのような「問い」を学び、そのような「問い」と「学び」を継承し蓄積することによって、初めて、可能となるのであろう。心理学の「問い」の歴史は、心理学の生命でもある。もちろん、何が、「心」に、また、「心理学」に、相応しい「問い」であるかということも、「科学」としての心理学によって、また、その自己理解によって、規定される。その意味で、「学問」としての心理学と「科学」としての心理学との関係は、相互に発展促進的かつ規定的で、便利な表現を用いれば、「弁証法的」である。

「科学」としての心理学は、「心」以外の対象をその探求と探究の対象とする諸科学に、「問い」を学ぶことも、もちろん必要である。「学ぶ」対象は広く、その「学ぶ」に限界はない。しかしまた、それらの諸科学の対象が「心」以外であることによって、その「問い」が、「科学」としての心理学が問うべき「問い」とは性質を異にする可能性も十分に考慮に入れなければならない。言い換えれば、「科学」としての心理学は、他の諸科学の「問い」に学びつつも、あくまで、その探求と探究が「心」に向かっていることを忘れずに、根本的には、「心」に、「心理」に、そして、「心理学」に、相応しい「問い」を問い続けなければならないであろう。個々の「科学」は、性質を異にする対象を探求しかつ探究している諸科学の「問い」をそのままに模倣して「問う」ことだけでは、つまり同じ「問い」をそのまま「学ぶ」ことだけでは、済ませることが出来ないし、そうしてはならない。自らの科学に相応しい「問い」を紡ぎ出さなくてはならない。そして、その「問い」の独自性こそが、その「科学」の「科学」としての独自性を形成するのである。もしそうした独自性がないなら、諸科学のなかの独自の「科学」ではないであろう。他の「科学」に吸収されてしまえばよいことになる。心理学は、「心」に相応しい「問い」を問うことによって、初めて、諸科学の中で独自の位置を

占める「科学」となりうるのである。独自の「問い」と「学び」を探求し探究する道を歩む「学問」としての「心理学」の可能性は何処にあるのか。ここに、例えば、「自然科学としての心理学」と「人間科学としての心理学」(Giorgi, Amedeo 1970: Psychology as a Human Science.) の分かれ道がある。それは、「心」に相応しい「問い」を問うているかという「問い」、これに対する応えとしての「学問」と「科学」としての心理学の「在り方」、その分かれ道なのである。もっとも、それぞれの心理学の探求と探究の営みにおける「心」について、探求し探究することは、一定の限界のなかで、学問としてまた科学としての心理学にとって、相応しいことであろう。例えば、「自然科学者を研究対象とする心理学」、「心理学者を研究対象とする心理学」、「心理学研究の心理学」などは、自己矛盾を孕むことなく「科学としての心理学」の一部となりうる。それは、「心」の「学」としての心理学の分担領域に相応しい探求と探究、相応しい「問い」が、その中で可能であろうからである。このことは、「心理学」の自己認識を、そして、より具体的には、心理学研究者の自己認識を、心理学研究の営みそのものの中に組み込む可能性を、心理学という学問・科学は内在している、ということである。言い換えれば、心理学という学問・科学にとっては外在的な「哲学」、「認識論」、「存在論」、「科学論」、「学問論」、「言語論」、「芸術論」、あるいは、「歴史」や「芸術」などを、持ち込むということをせずとも、「心理学」そのものの内部で、「心理学」の研究の営みを自ら解明し、それを深め豊かにし、自己認識を深めて行く可能性が「心理学」には内在している、ということである。もっとも、その際に、上記の諸学の「問い」と「学び」に学ぶことをせずに、果たしてどこまで行けるか、という「問い」は残る。さらにまた、そのような学びによれば、「心理学」の自己認識は、より速くより豊かに深められるであろう。しかし、心理学は、全体としては、哲学からの自立を渴望するあまり、上記のような諸学に学ぶことを回避して来た、という過去の苦い歴史がある。「心理学」は、したがって心理学研究者は、可能な限り、大いに諸学に「学ぶ」べし、という信念を私は持つに到った。心理学では、他の諸学への無知から、他の諸学においては既に常識ともなっている「問い」を、あたかも人類の新発見でもあるかのように、突然、珍重し始める、という滑稽な出来事がしばしば起こることを、見て来たからである。

「学ぶ」(まなぶ)とは「真似る」(まねる)であり、「真なるものに似せる」である。ここで一言付言するなら、「像」は、「人」が、「象」(かたち)を「真似る」ことを表す語として相応しい。「象」という字は、動物の「象」(ぞう)を表しもするが、「象」(しょう)としては、「目に見えるすがた、あらわれた物のかたち」を表し、「形象、氣象、対象、印象、現象、具象、抽象」などに用いられており、また、「目で見られない物を何かの形によって示す。似せた形を作る。かたどる」ことを表し、「象形文字、象徴」などに用いられている。

一方には、「人」の「象」を「真似る」ことと、例えば、人物像(figure)、自画像、肖像、

塑像、銅像など、がある。他方には、「人」が「象」を「真似る」こと、例えば、心像、映像、写像 (image) など、がある。「像」は、これらの双方を表現することを、可能にしている。その意味で、「像」は心理学の鍵概念となりうる資格を備えている。ここには、また、私が学んできたモデル (模型) とメタファー (比喩) の問題が姿を現している。人間の出来事を「真似する」物語 (narrative) の問題も、姿を現している。

ここで、真似るべき「真なるもの」としては、学ぶ自己にとっては、「問い」の主体である自己における「真なるもの」と、「問い」の客体である対象における「真なるもの」と、他者における「真なるもの」と、がある。したがって、学問には、自己における、対象における、他者における「真なるもの」を捜し求める、という意味が含まれている。ここで、「真なるもの」とは、覆い隠されているものであり、少なくとも、その探求と探究の初めにおいては、未だ、見出されていないものである。それだからこそ、探求と探究が必要なのである。そのように覆い隠しているものは、1) 「主体と客体」とを、2) 「自我と対象」とを、3) 「自我と自己」(「主我と客我」とを、隔てるものである。それは、第一には、主体である自己の無知、傲慢、怠惰 (ignorance, arrogance, and indolence) であるが、主体が生きることの実存的で必然的な制約に伴う視点の限定と視野の不可避的で本質的な狭隘さ、主体の生きられる世界の本質的な貧困さである。第二には、対象の仮象、隠蔽、虚像、虚偽、見せ掛け、目くらまし、などである。そして、第三には、人と人との根底に横たわる、他者の世界と自己の世界の間を隔てるもの、他者性、他者理解を妨げるもの、歪曲、無理解、誤解、曲解、そして、自我あるいは自己と他者の間の同一と差異、言い換えれば、その間の連続と不連続である。

2) 「心理とは何か?」 「心理」の「理」は、「哲理、論理、物理、法理、経理、文理、倫理、整理、生理、病理、天理、地理、道理、学理、理論、背理、空理、真理、審理、・・・」に共通しておりそれらに通底している「理」としての「理」を表す。「物事のすじみち。ことわり。」を表す。「ロゴス」(Logos) としての「理」である。「構造と意味」と見なすこともできる。それは、求められ究められるべきだが、しかし覆い隠されて現れていないもの、としての「理」である。「心理」の「理」は、そうした「理」のうちでも、「心」における「理」である。「心理」とは「心の理」である。「心理学」で明らかにされるのは「心理」である。「心理」として何を求めるかは、心理学の多種多様な立場により異なることは、既述の通りである。

3) 「心とは何か?」

次の「問い」は、自然に、「心とは何か?」となるであろう。

私のそもそも最初の答えは、「心とは真似するものである」であった。心理学の「学」に繋

げて「真似する」ということによって、「心理学」の「学ぶ」（まなぶ）と「心」そのものの「学ぶ」（真似する）の内在的な関係を明らかにしようとしたのであった。

ここで、「真似するもの」における「もの」とは「者」でも「物」でもなくて、「もの」であり、「そのようなあるもの」を意味する。英語の表現の“something…”に相当する。ある対象が何であるかをまったく知らずとも、その対象を「あるもの」とは呼ぶことができる。そのように使う時の「もの」である。

そして、「あるもの」としての「心」が、どのようなものであるかを、私は徐々に記述し始めた。例えば、それが「反映するもの」（弁証法的唯物論）であるとか、「志向するもの」（現象学）であるとか。「受動と能動の両方の性質をもつもの」であるとか、「見えないもの」であるとか、「在るか無いかかわからないもの」であるとか、「私の心と他者の心は、私にとっては、異なるもの」であるとか。また、「私の心」は、「私には直接に知ることができるように思われるもの」であるとか、「他者の心を通して、私が知ることができるようなもの」であるとか。「選択し欲望するもの」である。「身体のどこかに在るとされるもの」、ある立場では「脳の機能であるとされるもの」、「時間の流れに沿って変わるもの」などなどである。こうして、最初は、幾つかの直観的で簡潔な言葉で「心」の最も中心的な性格づけを表現できないだろうか、と考えて始めたのだった。が、書き進めるにつれて、いつの間にか、草稿は膨らみ続け、気がついてみると、数十枚になっていた。そして、まだまだとても終わらせることが出来ないことに気づいた。私自身はこの心躍る探究の迷路に迷い込んでしまっていた。そして、最初に掲げた、別の目的をもつこのような小論のなかで、その一部としてでは到底書き尽くすことができない、ということに気づかざるを得なくなった。時間（執筆のために残された時間）と空間（小論文に残された紙幅）の制限によって、「心とは何か？」への私の答えの無謀な試みは、こうして無残に挫折した。そして、少なくとも、今回の機会では、その全体の展開は諦めて、捲土重来を期するべきである、と考えるに到った。しかし、折角時間を掛けて考えてきたことのうちには、試論としてそれなりにまとまった個所も幾つか出来て来たので、せめて、その内の一つの「問い」にだけは、ここで、答えることを試みておこうと思う。その一つとは、「心」は、「在るか無いかかわからないもの」という性格づけに対応する、「心なるものは、果たして、在るのか無いか」という「問い」である。

直ちに、「問い」は「問い」を誘って、次々に、続々と「問いが」現れる。「心が在る」とは、また、「心が無い」とは、どういうことなのか、という「問い」。また、誰がその有無の判断を正しく下せるのか、という「問い」。どのようにして判断できるのか、という「問い」。そして、もちろん、「正しく」とは何か、「判断」とは何か、という「問い」。そして、誰が「正しく」判断を下せるかという判断を、誰が「正しく」判断できるか、という「問い」への無限遡行が始まる。さらに、そのように遡る「問い」は、果たして、最初の「問い」と同じ質

の「問い」であり続けるか、という「問い」。「心」は、どのように「在る」のかという「問い」、また、そのように「在る」「心」をどのようにしてそれに接近し、それを「認識する」あるいは「知る」ことができるか、という「問い」も、当然、問われる。これらの問いのそれぞれに、答えようとすることは、たいへんだ。そもそも、これらの「問い」に答える能力を私が所有しているかどうかさえ、怪しくなって来るのだから。しかし、次のようなことが、私の「心」に浮かんで来た。それをとりあえず報告しておきたい。

まず、「心」が在るとする多種多様な場合がある、ということである。見出しとする8語漢字は、その内容を表現する言葉として考案したものである。

1) **心在直接接近可能** 「心」は在り、しかも、直接に接近することが可能である、とするもの。例えば、内観、内的観察、自己観察、などにより接近が可能であるとする場合である。後に内観主義者たちと呼ばれたが、当時は、自らを端的に「心理学者」と呼んでいた、と伝えられる人々、例えば、Wundt や Titchener らは、「内観」がその直接の接近の経路である、と考えていたのであろう。内観は、この立場においては、心理学の重要な方法であるばかりでなく、ほとんど主要な唯一の方法だった、のであろう。内観については、いずれ検討する予定を立てている。さて、この立場からすると、一人称の心理学が、その特権を取り返すべきだ、という考えも生まれてくるだろう。フッサールは、彼自らの「心」を研究して、現象学的還元の方法を発見し、その壮大な現象学を築いたのではなかったか。現象学的立場からの、心理学における自己観察法の再評価と再検討が緊急の重要課題である、と今の私には強く思われる。

2) **心在間接接近可能** 「心」は在り、「心」の外部への表れとしての観察可能な現象を通して接近可能だ、とするもの。この立場をとるなら、心のあらゆる「表現・流露」が、「心」への接近の糸口となる可能性を秘めていることになる。ただし、「心」と「表現・流露」との関係が知られて初めて、「表現・流露」から「心」を知ることができるのであろう。それゆえ、未だに捉えられていない「心」が「表現・流露」とどのような関係にあるかが分かれば、「表現・流露」から「心」を知ることができるのだが、という愚痴に終る場合がある。ここで、「表現・流露」から遡って、あるいはそれを媒介として、「心」に接近し到達することは、まさしく心理学の課題である。そうして、「表現・流露」と「心」の関係を明らかにするのが心理学研究である一方、その関係によって、「心」を明らかにすることができ、ひいては、「表現・流露」との関係も明らかに出来ることになる。これが、心理学研究における、いわゆる「認識と方法」の弁証法的関係である。このお陰で、「心」についての「認識内容と認識方法」とは、あたかも、高層ビルを建築する際に欠かすことの出来ない二つの大型クレーンの相互関係にも似て、相互にその質を高めあって行くことが出来る、とすることになる。ここでは、独自の

仕方で「在るもの」を、つまり「見えるもの」としてではなく本質的に「見えないもの」としての「在るもの」を、「見えるもの」を通して接近する可能性と現実性が問われているのである。弁証法的唯物論の心理学は、このような立場を採るようである。

3) 心在否不明構成可「心」が在るのか無いのか、懐疑的である立場がある。「心」は、在るようでもあり無いようでもある。あるいは、在るともいえるし、無いともいえる。「心は在る」についての厳密かつ強力な証明を、いわば気難しく、求める場合には、ことに他者の「心」について、その証明を求める場合には、この立場は、説得力をもちうる。他者の「心」を直接に見たものは、確かに、誰も居ないのだから。しかし、仮に懐疑的ではあっても、それは、過度に厳密な議論の場合であって、日常的常識的には、他者についてさえも、「心は在る」と当然視して生活しているのが、無自覚に生きる多くの人間のありようなのだから、研究者としても、この議論を避けて、あるいは、棚上げして、とりあえず、仮に、人間誰にでも「心」は「在る」と指定して（「在り」として）、その「表現・流露」と想定されるものを通して、想像自由変更によって、その「在り方」を想定し、推定すること、あるいは「表現・流露」から「本質直観」することが可能である。現象学の場合なら、そのように指定された「心」の「在り方」をさらに指定して、それによって、その指定された「在り方」の「表現・流露」としての多様な「心理現象」を、その「在り方」の「表現・流露」として、そこから遡って、射映から対象を構成するように、「心」を構成し理解することが可能となるのだ、とすることが可能であろう。

4) 心在否不知現象囚「心」が在るのか無いのか、不可知であるとする場合。誰にもわからないであろう、とする場合である。もっとも、「誰にもわからない」とは、どのようにして「わかる」のか、という「問い」に、この立場は、どう答えることができるのか。その意味では、素朴には、この立場は、自ら眼を閉ざして、「僕には見えないから無いのだ」と言っている聞き分けのわるい子どものような印象を受ける。人により可知であったり不可知であったりする、というのなら、納得できる。だが、総ての人間にとって不可知である、と断定することが、ひとりの人間にどのようにして可能であるか、それこそ不可知ではないか。私の共感的理解の範囲を超えている。そもそも、「心」の存在そのものが不可知であるとする場合、その存否が不可知なるもの、つまりそのように存否さえ不明で不可知な「心」を捉えようと努めること自体が、自己撞着となるのではないか。むしろ、「心理学」の放棄こそが、その答えになるのではないか。この立場を貫くならば、「心」の「表現」も「流露」も、「表現・流露」としての性格を剝奪されることになるはずである。しかし、この立場を採っても、なお、研究は可能であろう。つまり、「心」は、在るのか無いのか不可知ではあるのだが、仮に在るにせよ無いにせよ、そのどちらにせよ、「心」について可能な「学問」は何か、として研究を進めることはできるだろう。研究としては、在るか無いか不可知であるものについては、その

「在り方」を「問う」ことなどは諦めてしまい、差し控えた上で、あくまで、観察可能で接近可能な現象の間の規則的で、普遍的で、不変的な法則的關係の知識の集積をもって、「心」なるものを巡る「心理学」とすることになら可能であろう。もっとも、その研究の成果を、他者に伝えるときも、他者の「心」に伝えるのではなく、あくまで、上記の「心理学」の知識の集積に貢献するためであるとするのでないと、この立場は、自己撞着に陥り、一貫性を失うであろう。この立場は、一貫性を保とうとすると、実に不安定で危げかつ脆い立場のように、私には感じられる。

4) の場合は、1) 2) 3) と 5) 6) 7) のちょうど中間に位置するように思われる。

さて、以上の四つの場合に加えて、「心」が無い、あるいは、在りはしない、という場合もある。この場合、「無い」とはどういうことか、という「問い」が重要であろう。少なくとも、三つの場合が考えられる。A) 「無い」とは、この現実世界に存在しない、と主張する場合がある。B) 「無い」とは、研究において、「心」を視野には入れず、「無い」として、「無視して」、「心」を考えない「心理学」を創造することを構想する場合がある。さらには、C) 「心」を実は考えては居るのだが、「科学の研究」においては、あるいは、「科学の研究」としては、公にそれについて語ることを自他に禁止し、別の語り方をする場合である。

5) 心無行動法則科学 「心」など無い、在りはしない、とするA) の場合。しかし、「物」は在る、とするのである。つまり、「物は在るが、心は無い」とする。この場合は、端的には、「意識なき心理学」である「行動主義心理学」を高らかに宣言した1924年当時のJ.B. Watson のような立場である。ワトソンは、こう書いていた。「つねに実験家として訓練されている行動主義者は、さらに、意識というものがある、という信仰は、迷信と魔術のあの大きに生まれたものだ、と主張する」(ジョンB.ワトソン著『行動主義の心理学』1968年、安田一郎訳、河出書房新社、15-16ページ/)。原文はこうなっている。“The behaviorist, who has been trained always as an experimentalist, hold, further, that belief in the existence of consciousness goes back to the ancient days of superstition and magic.” (John B. Watson, 1924, 2.). 私には、以上の言葉は、意識の存在について述べているというよりもむしろ「存在」、「在る」ということ (existence) の規定となっているように、感じられる。これは、存在論の問題である。

6) 心無視唯行動制御 さらに、B) の場合。この立場では、「心」などという観察不能な対象を研究から除外する。例えば、B.F. Skinnerの急進的 (あるいは、根源的) 行動主義のような立場の研究が、自然科学的な心理学研究の王道である、とすることになるであろう。科学研究者としては、「心」を研究から除外したB.F. Skinnerではあったが、しかし、彼は、その若き日には、小説家志望の青年として文学に親しんでいた、と伝えられる。そこで、私人としての生活において、例えば、恋人の「心」を思わなかったとは、想像しにくい。彼は、家

族や友人までも、その「心」を無視して、それぞれを「オペラント条件付け」していたのであろうか。そのようなことは恐らく無いであろう。彼においては、研究における科学的厳密性と一貫性や整合性を求める故に、科学研究生活を私的生活から遮断していたもの、と私には想像される。しかし、これは総て、私の想像と推測に過ぎない。

7) **心推測不言唯実践** さらに、C)の場合。若い日のエピソードを想起する。それは、私たち若い研究者たちの尊敬の的であった梅津八三先生が、盲聾啞の子どもの訓練に当たって、新しく独創的な訓練法を発明されるその発想の豊かさを感嘆していた友人から、ある時、聞いた話である。その友人H氏の想像では、梅津先生とても、子どもが何を考えているか何を感じているか、ということを考えて推測していないはずは無い、というのであった。そして、もし、その推測した内容を惜しみなく語っていただけたとしたら、どれほどか若い研究者の我々には学ぶところが大きいことであろうに、というのが、その友人の残念がっていたことであつた。一方、ある時、その梅津先生が大学院のゼミで、「論文では、そのような推測に過ぎないような内容を語るものではない」との趣旨のことをおっしゃった、と伝え聞いたことがあつた。以上の梅津先生のエピソードが真実であるか否かはともかく置くとしよう。それにしても、以上のように、研究において働かせている推測と推理も、科学研究の発表においては、総て除外し排除して、観察可能な事実のみに限定して語るのこそ信頼に値する厳密な実証科学であるとする立場は十分にありうるであろう。明確な一つの立場である、と私は考える。

以上、ここでは、**心在直接接近可能**、**心在間接接近可能**、**心在否不明構成可**、**心在否不知現象因**、**心無行動法則科学**、**心無視唯行動制御**、**心推測不言唯実践** の七つの立場を典型的な場合として挙げて見た。それぞれの詳細よりも、以上のように、「心」の「存否」の問題は、それへの「接近可能性」の問題と、それぞれの立場において、相互に密接な対応関係を成していることが明らかに出来ればよい、とここではしておきたい。一方についての立場が定まれば、他方についての立場も、自ずから、ある範囲に収まるようになっていく、ということの確認である。このことの確認には、「統合的心理学」を構想するに当たって、大いに意味がある、と私は考えている。

率直に言って、現時点での私個人は、次第に、まことに素朴に、1)と2)の立場が最も納得が行くものとなって来ているように思われる。これは、いわば極めて常識的な立場である。しかし、この私の常識には、唯物論と観念論の紆余曲折を経て到達した結果の、常識への帰還なのである。そして、この常識の立場からの研究が可能であるし、それには積極的な意味があり、また、そのために求められる想像力は莫大であり、その研究は挑戦に満ち満ちている、と現在の私は確信することができる。

また、この常識的な立場を、哲学的に、認識論的に、存在論的に、あるいは、科学論的に、

検討し、この常識を否定し攻撃する立場に対して、常識を肯定する立場と否定する立場の両者を含めた全体を包括する立場を構築することは、心理学において、これからの「統合的な心理学」を確かな学問で科学とする目的のために、留意すべき、重要な仕事である、と私は考えている。

ここで、「在るか無いかわからないもの」としての「心」の「存否」についてのさまざまな考え方についての省察の試みを、とりあえず終える。

ここでは、「心とは心理学によって、それが何であるかを明らかにされるべきもの」である、とだけ記し、「心とは何か」の「問い」への応答は、次の機会を期することとして、それとは別の迂路を経て、この小論の最初に掲げた当初の目的を達しようと考え始める。その目的を再確認するなら、「心理学の統合化を求めるのは何故か」という問いに答えることである。

心理学の統合化と「利用の人、知の人、直観の人、包括の人」(ゲーテ)

ここで、「心理学の統合化を求めるのは何故か?」という「問い」に直接に答えようとすることから、意図的に、視線の方向を変えて、いわば「問い」の方向をずらして、「心理学の統合化を求めるのは誰か?」という問いを考えてみることにしたい。

「何故か?」という「問い」は、「統合化を求める」人間には、答えは自明であるように思われて、問う必要さえ感じられず、問わずに済まされてしまうものである。上の新しい「問い」は、この観察から生まれている。「統合化を求めない」人間には、この「問い」への答えが得られなければ、そもそも「統合化」を求める気持ちさえも起こらないだろうし、また、「統合化」を求める人間に対する理解も共感も生まれまいであろうからである。

そこで、「誰か?」を、問いとするのである。

ここで、ゲーテが認識の段階として人間のタイプを4つに分類していたことが、想起される。すなわち、「利用の人、知の人、直観の人、包括の人」の4タイプであり、それらは、以下のように説明されている。少々長くなるが、引用することをお許しいただきたい。

「一、利用の人、つまり効用を求め、それを要求する人が最初の段階に位置している。彼はいわば学問の領域の輪郭を描き、実用的なものを掴みとる。経験を積んできたという自覚が彼に確実さを、必要が一定の幅をあたえる。/ 二、知識欲に燃える人は我欲のない落ち着いた眼差しと、好奇心にみちた生き生きとした感情を、かつまた明晰な悟性を必要とし、つねに利用の人と不即不離の関係にある。つまり知の人は、目の前にあるものをもっぱら学問的な意味で検討する。/ 三、直観の人はすでに創造的な態度を有している。知は高昇するにつれて無意識のうちに直観を求め、そのほうへと移行してゆく。そして想像がいかに知の人の忌避するところではあっても、彼の本意に反してやがて創造的な構想力の助けを借りずにはいられ

なくなる。/ 四、包括の人こそ最上の意味で創造の人と言えるであろう。彼の態度は最高度に創造的である。つまり彼は理念から出発することによって、すでに統一的な全体を表現している。そしてこの理念に合致することは、いわばそのあとで自然のなすべき仕事であろう。

(中略) 学者はいかなる学問的研究においても、利用の人から包括の人にいたるまで変貌しうることを弁えていなければならない。/ と同時に、いま自分は利用の人なのか、知の人なのか、直観の人なのか、包括の人なのか、はっきりと意識していなければならない。/ またそのどの段階においても、自由かつ快適に動けるような習慣を身につけること。」(高橋義人編訳・前田富士男訳, 1982. 123-124)

以上の、人間の分類は、単純であるが、それぞれの認識態度の核心を衝いている、と私には感じられる。流石にゲートである。すなわち、それぞれの種類の人間が、何を求めるかという、認識の動機と欲求あるいは欲望を視野に収め、それぞれの「心の求めるもの」として鋭く直感的に、スケッチ風に鮮やかに描いているからである。では、それぞれが、心理学と統合的心理学に、あるいは心理学の統合化に、何を求めるかを考えてみよう。

以上の四タイプの人間は、心理学の研究対象としての人間について考えることも出来るし、心理学の研究主体としての人間についても、同様に、考えることができる。ここでは、研究し学ぶ人間主体について考える。すると、心理学を学問として研究し学ぶ人間たちに、四つのタイプを考えることが出来ることになる。それぞれの人間タイプの特徴を、「統合的心理学」との関係において、想像を逞しくして、描いてみよう。

なお、この四類型を、人間の性格づけの四次元尺度に転換する構想も、認識態度発達の四段階に転換する構想も、さらには、四類型の人間集団や組織による「心理学」形成とその研究集団や組織を想像する構想も、考えられる。それらの展開は差し控える。

さて、第一に、「利用の人」、「効用を求め要求する人」。このタイプの人間にとっては、心理学は、実用と効用においてのみ、役に立つという限りにおいてのみ、評価される。「役立つ」心理学的知識と「役に立たない」心理学的知識との識別が、この人にとっては、最も重要である。この人が実用を求める関心範囲の広狭によって、関心をもつ心理学の範囲の広狭が定まる。役立つ心理学的知識と技法の「マニュアル」のカタログが便利に出来ていれば、とりあえず、それで十分である。この人にとって、心理学が統合されようとされまいと、生活への、心理学の「役立ち方」がそれによって増すのでないかぎり、何の意味もない。この人には、むしろ、「多種多様な心理学の統合化」は、心理学という百貨店の多種多様で豊かな品揃えを貧しくすることになりはしないか、と危惧されるのである。心理学が多種多様であることは、そのまま歓迎されるべきことなのである。

第二に、「知の人」、「知識欲に燃える人」。このタイプの人間にとって、多種多様な心理学は、人間の「心」に関する知識の宝庫である。常識的なことも常識を超えることも、知識欲

に燃えるこの人は、心理学的知識として、興味津々、眼を輝かせて、学ぼうとし、探究し、貪欲に吸収する。それが何の役に立つかは、敢えて問わない。新しいこと、珍しいこと、意外なことを、探究し知ることすなわち、この人の喜びなのである。子どものような純な心の持ち主であるこの人は、こうして得たこれまで未知であった心理学的知識を、他者に分かち合うときも、他者が、同じように、知を獲得することを純粋に喜ぶと、信じて疑わない。「心理学の統合化」は、この人にとって、無ければならないことではないが、見事に「統合化」されるならば、その統合化そのものも、一つの新しい知として位置づけられ、知識欲を満足させる一つの知として、歓迎される。しかし、「統合化」が、多種多様な心理学と出会うことによる知識欲の満足と喜びを奪うことにもしなるなら、この人は、統合化を歓迎しないであろう。

第三に、「直観の人」、「創造的な構想力豊かな人」。このタイプの間人にとって、多種多様な心理学は、その根底にある多種多様な人間理解を直観させる興味深い標本である。そして、いわば芸術家肌のこの人にとって、多種多様な心理学の、いかに正確であろうと冷たい論理に基づく分類整理は、それがもし全体的に直観的な美しさを生き生きと感じさせないものならば、標本箱に分類整理されて死んだ標本にも等しく、魅力のある「統合化」とは感じることはないであろう。むしろ、多種多様な心理学が、それぞれの発生の現場で、それぞれなりに、躍動している姿をそのままに眺め、多様性の中に直観的にある統一性を自ら見出すことに成功するなら、この直観の人は、その「統一性」の発見そのものを、心から喜ぶであろう。この人は、美を感じさせる「統合化」を歓迎するであろう。それは、この人の直観を満足させ、構想力を刺激するゆえに。

最後の第四に、「包括の人」、「理念から出発して統一的な全体を実現している人」。この人にとって、多種多様とは言えば聞こえがよいが、互いの関係さえ定かでない、混沌と無秩序のなかにある無数の心理学と心理学的知識、それを生産し続ける心理学的研究の無秩序な累積は、その根底に求める「統一性」が見出されない限り、満足すべきものでは決してない。彼が求めるのは、多様性を保ったまま、その多様性の中から現れる統一性である。その統一性、あるいは、統一的理念の発見によって、相互に無関係と思われていた無数の心理学的知識と研究が、突如、ある構造をもって、関連づけられ、組織化されて来る。それは、例えば、万有引力の法則によって、無数の力学的事実が統一的に理解され、また、無数の知識が根本において相互に関係づけられて理解される、その時の喜びを、彼は求めている、とも言える。とは言え、彼は、かつては「利用の人」でもあり、「知の人」でもあり、また、「直観の人」でもあった経験があり、それゆえに、三タイプの間人それぞれの、必要と欲望を熟知している。そして、彼は、それぞれに、適切な状況において、適切な認識態度を採ることができる柔軟さを身につけている。「心理学の統合化」は、彼には、改めて言うまでも無い必要であっ

て、敢えて、その必要を問うことも、また、説くことさえも不要なことだと、彼には思われる。とは言え、「心理学の統合化」は、多種多様な心理学の研究と知識の巨大な集積に対面して、その秩序を発見し、その秩序のお蔭で、常に、いま、何ゆえに、この心理学を、このように、学び研究し、活かしているのか、また、活かせるのか、を弁えて、状況状況に適切に対応しつつ、心理学の歴史全体を、現在に有効に活かすことを可能にする。その意味で、この人の目には、「統合化」は、「利用の人」にも、「知の人」にも、「直観の人」にも、そして、「包括の人」である自らにも、それぞれの仕方、当然のこと、大いに歓迎すべきことであるはずだ、と映るであろう。

そこで、明らかになることは、多種多様な心理学の「統合化」は、総ての人々によって、必ずしも、同じように必要を痛感され歓迎されるわけではない、という可能性である。ことに、「利用の人」と「知の人」にとっては、「統合化」の必要は余り感じられないのかもしれない。多種多様な心理学の統合化は、総ての人々によって必要が痛感されているわけでも、欲せられ望まれているわけでもないのに、乱雑な混沌の中から美しい秩序を見出すことに喜びを覚える「直観の人」あるいは「包括の人」によって、達成されることが必要なのだ。仮に、もしそのような理念と秩序が見出されて、「多様性を通じての統一性」が実現されたなら、そのときには、結果として、総ての人々が、その恩恵を被り、その統一的な洞察と美的な直観を喜びとして経験することだろう。だが、それまでは、総ての人がそれを同じように欲求する状況を望むことは、無理だと言わなくてはならない。「統合化」の実現は、無視され、厭われ、理解されずとも、その困難な状況を理解している「包括の人」によって推進される必要があるのだ。

こうして、「心理学の統合化を求めるのは何故か」という問いは、まず、誰が問うているのかによって、その意味が異なること、そして、誰が誰に答えるかによって、その答えが異なることがわかる。あることが「必要である」ことは、それを「必要としている」人にとっては、論じるまでもない。しかし、必要としていない人あるいは必要を感じていない人に、「必要である」ことを説いて納得させることは、必ずしも容易ではないことがわかる。それにも関わらず、その現在は必要としていない人が、必要とするようになったとき、その必要を満たすものが目の前にあることを見出したとしたら、その人も、恐らく、喜ぶに相違ない。

こうして、「心理学の統合化を求めるのは何故か」という「問い」への「答え」は、その「問い」を発しているのは誰か、それに「答え」ようとしているのは誰か、という「問い」への「答え」によって、多様に変化するであろうことが知られる。

「心理学の統合化」には、そのようなところがある、と私には思われる。

心理学が如何なる学問であるか、については、別の見方も可能である。そもそも、学問と

科学の分類には、これまた、多種多様なものがある。それによって、「心理学の統合化を求めるとは何故か」という「問い」への「答え」も、また、変化する。そこで、この小論の最後に、試みに、私が整理した人間研究の四類型に関連付けて、心理学の研究の多種多様性と、それに伴う統合化への欲求の多様性に、触れてみることにしたい。

人間心理研究の四類型と心理学統合化

私は、かつて、人間研究そして人間心理研究に、次に挙げる四つの類型を区別して、提起したことがある。すなわち、「因果分析科学」、「目的達成技術」、「人間理解教養」、「解放倫理実現」(吉田章宏,1995, 52)の四類型である。これは、J.ハバーマスによる、認識関心についての、「技術的」、「実践的」、「解放的」の三類型(1975,591—599)。K—O,アーペルによる、合理性(Rationality)についての、(1)因果分析の科学的合理性、(2)目的合理的行為の技術的合理性、(3)理解あるいは理解に到達する解釈学的合理性、(4)倫理的合理性、の四類型(Apel, Karl—Otto,1984,284)に、私なりに学んで、自分が納得の行く類型にまとめることを試みたものであった。上記の四類型は、それぞれに、一定の価値実現を目指していることは、明らかであろう。

すなわち、「因果分析科学」は、典型的には、「自然科学としての心理学」がそれに当たる。その意味では、「自然科学」を代表する「理学」に親近性があり、まさに「心理学」というに相応しい。その研究動機は、「因果」関係を分析して「心理」としての合法則性を明らかにする「科学」であることを目指す。この立場からすると、「心理学の統合化」は、心理学の中の「科学」とは呼べないような、いわば不純な心理学をも包摂することを意味する恐れがあり、望ましくない、ということになるかもしれない。ゲーテの言う「知の人」の学問である。

「目的達成技術」は、典型的には、例えば、「教育工学」と密接に結びついたマニュアル化された心理学が、これに当たるであろう。これは、「理学」との関係においては、「工学」に当たるもので、敢えて造語すれば、「心理学」に対比される、「心工学」とも呼べるであろう。その研究動機は、与えられた目的実現のための最適の技術を提供することにある。誰にでもすぐ役立つ技術のマニュアル化が歓迎される。この立場は、上記の「因果分析科学」としての「心理学」と結びついて、心理学の中の、「理学」と区別される「工学」であることを目指す。この立場も、「心理学の統合化」を特に望むわけではない、ということになるかもしれない。ゲーテの言う「利用の人」の学問である。

「人間理解教養」は、典型的には、私見によれば、「解釈学的心理学」や「現象学的心理学」が考えられる。多種多様な人間や、そうした人間たちの営みから生まれる多種多様な心理学とその研究の総体を深く理解し、可能な限り共感し、人間に関する人間の学問を、総体として統合化しよう、という動きになるであろう。「人間科学としての心理学」がそれに当たるか

もしれない。この学を学ぶことは、人間理解において、結果として、「他者に共感すること」を学ぶという意味で、H.ガダマーの言う「教養」を身につけることにもなる。この心理学を学ぶ者は、単に知識を獲得することに終らず、学ぶことにより、人間としての在り方と生き方が変わることを期待する。また、そうでなければ、真に学んだことにはならないであろう。この立場こそは、「心理学の統合化」を強く望むであろう。多種多様な「心理学」を理解すると共に、そうした心理学を生み出した多種多様な人間たちとそれぞれの置かれた状況を理解することが、目指されるであろうからである。ゲーテの言う「包括の人」の学問である。あるいは、「直観の人」の学問でもあるかもしれない。

「解放倫理実現」は、その目的を、単なる「知の獲得」に置くのではなくて、その知の獲得と実現を通して、人間、ひいては、人類の置かれた悲惨な状態から人間を解放し、人間のあるべき理想の姿を実現するために、一歩でも進めようと言うのである。例えば、貧困、死別、戦争、災害、犯罪、無知、精神病、偏見差別、虐待、などなどの不幸から人間を解放し、人びとの幸せな社会と世界を実現しようと願うのである。そのような心理学の立場からすれば、「心理学の統合化」は、理論的あるいは学問的な問題であるというよりは、むしろ、実践的で倫理的な問題とみなされるだろう。無知の故に悲惨な状態に留め置かれている人間世界をその悲惨から解放するための科学・学問としての「心理学の統合化」により、心理学の実践的な倫理実現が可能となることが熱望されるからである。心理学は、偶然に生じた個人的な興味関心の趣味的な営みや、純粋な学問的な伝統の中での、学界の流行を追いそれに流される「アカデミック」な知的営みや、利害や利潤追求に結びつく限定された目的実現のための心理技術の提供や、さらには、単なる個人的教養の豊富化の基盤となるだけでなく、人間社会の倫理の実現と悲惨からの解放のための実践へと変貌することが、この場合には、「心理学」に求められる。「心理学の統合化」は、そのための必須条件とみなされるかもしれない。ここで、ゲーテの認識態度の分類におけるこの「解放倫理実現」の視点の欠落は注目されてよい。「科学」と「学問」にこの視点を求めるのは、あるいは20世紀以降の出来事なのかもしれない。

以上のように、「心理学」という学問・科学が、如何なる学問であるか、あるいは、如何なる学問を目指すかによって、「心理学の統合化」ということの意味も意義も、大いに異なってくるであろう。

「心理学の統合化」は、そうしたことの総てを包括するものとして、実現されることが、待ち望まれているのだ、と私は考える。以上をもって、さまざまな在り方をしている学問のそれぞれからみた「心理学の統合化」の意味についての試論をひとまず終える。

さて、自問する。これが、「心理学の統合化を求めるのは何故か？」という「問い」への些

かなりとも「答え」になっているか、と。それは、「問う」のは誰か、「答える」のは誰か、という「問い」へと導く。そして、そのように自問自答する私は、本稿では、以上の「答え」の不足を感じつつも、「私は誰か?」という「問い」を自らに引き受け、かつ、「心」について今後の更なる省察を自らに約し、「何のために?」という問いから「どのように?」という問いに、今後の省察の力点を移して行こうと考える。

文 献

- インガルデン R., 1972/1959, 金田晋訳「エドムント・フッサールにおける超越論的理念論について」,
E. フィンク他, 立松弘孝他訳『フッサールと現代思想』せりか書房
- 高橋義人編訳・前田富士男訳, 1982, 『ゲーテ 自然と象徴: 自然科学論集』富山房
- ハーバース, J., 1975, 細谷貞雄訳, 『理論と実践』未来社
- 吉田章宏, 1995, 『教育の心理: 多と一の交響』放送大学教育振興会, pp. 321
- 吉田章宏, 2002, 心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の人称性: 我, 汝, 誰彼の心理学
淑徳大学大学院研究紀要, 第9号, 43—56
- 吉田章宏, 2003 a, 心理学研究方法論をめぐる省察: 心理学の多種多様性について
淑徳大学社会学部研究紀要, 第37号, 149—165
- 吉田章宏, 2003 b, 心理学研究方法論をめぐる省察: 三心理学の不連続化と連続化の道
淑徳大学大学院研究紀要, 第10号, 1—17
- 吉田章宏, 2004 a, 心理学研究方法論をめぐる省察: 多種多様な心理学の統合の可能性
淑徳大学社会学部研究紀要, 第38号, 219—240
- 吉田章宏, 2004 b, 発問の芸術にみる開放性: ある達人教師による実践の現象学的解明
淑徳大学大学院研究紀要, 第11号, 1—34
- ワトソン, J.B., 1968, 安田一郎訳, 『行動主義の心理学』河出書房新社
- Apel, Karl-Otto, 1984, G. Warnke trans., *Understanding and Explanation*, MIT Press.
- Giorgi, Amedeo, 1970, *Psychology as a Human Science: A Phenomenologically Based Approach*,
Harper and Row
- Ingarden, Roman, 1964, *Der Streit um die Existenz der Welt. I*, Max Niemeyer Verlag
- Watson, John B., 1924, *Behaviorism*, The Univ. of Chicago Press

A Meditation on the Research Methodology in Psychology: Why is the integration of psychologies necessary?

Akihiro YOSHIDA Ph.D.

After having written the four preceding methodology articles, the author turns back to the origin to ask himself a Why-question: Why is the proposed integration of diverse psychologies necessary? This article is the author's attempt to respond and answer to the self-raised Why-question, to solidify the foundation of further meditation. The author begins with the explication of the network of the concepts: Psychology, Psyche, learning and science, particularly, with regard to the Japanese expressions for these concepts: *Shinrigaku*, *Kokoro*, *Gakumon*, and *Kagaku*. Supposing that Psychology as a whole were a "science of *Kokoro*", the author asks the question "Does the *Kokoro* (Psyche, mind, soul, spirit)--- the object and the subject in the science of psychology--- exist?" to which the seven possible viewpoints among psychologies were described, to show the diversity among psychologies even regarding the very existence of its subject matter, i. e. *Kokoro*. A further exploration was made into the possible relationships between the experienced necessities for the integration of psychologies, on the one hand, and, on the other, A) the four types of cognitive attitudes in persons (Goethe), and B) the four types of the possible objectives being held by human scientific disciplines (Yoshida). The meanings of the self-raised Why-question were shown to differ according to each of the types in A) and in B), which is to lead into a further exploration in the future of the question: Why, by Whom, and How the diverse psychologies will and must be integrated.

